

星野太氏の博士号（学術）学位請求論文『修辞学的崇高の系譜学——ロンギノスから現代へ』は、ロンギノスの『崇高論』を手掛かりに、西洋近代において発明された「美学的崇高」とは異なる「修辞学的崇高」の系譜をたどり、その哲学的な可能性を現代の言説において検討した労作である。

紀元一世紀頃の作と推定されるロンギノスの『崇高論』は、西洋近代において文学、美学、古典学といった領域で重要な参照項として言及されてきたが、文献学的な研究を越えてその内容の哲学的検討は十分になされてこなかった。本論文は「修辞学的崇高」すなわち「言語を対象とする崇高」を鍵概念として、まずはロンギノスの『崇高論』を哲学的に読解することから始まる。第Ⅰ部「『崇高論』と古代」では、自然と技術、言葉と表象、瞬間と永遠という三つの対概念からその読解を展開した。

第一章「真理を媒介する技術——「ピュシス」と「テクネー」」では、ロンギノスが言語に内在した卓越性としての崇高を得るのに、自然に属するもの（「偉大な思考を形成する力」や「強く熱狂的なパトス」）だけでなく、技術に属するもの（「適切な比喩の形成」、「高貴な言葉づかい」、「威厳と気品に満ちた構成」）を重視したことの意義を明らかにする。技術（テクネー）は、真理を歪める詐術に陥る危険があり、古代においてはそれがたえず問題にされてきた。ところが、ロンギノスは『崇高論』において、比喩に代表される技術こそが、かえって自然（ピュシス）が自然として現れることを可能にしていると考えた。現代において論じられる比喩の退隠という仕組みにも通じるような考えをロンギノスはすでに展開していたのである。

第二章「情念に媒介されるイメージ——「パンタシアー」と「パトス」」では、空想や幻覚という意味をしばしば有してしまう「パンタシアー」が、アリストテレスやストア派の定義においては受動的な契機として扱われていたが、それをロンギノスはより創造的なものに転換し、他者との間での「パトス」（これもまたアリストテレスやストア派では消極的に扱われていた）の共有である共感を動因として、語り手の「パンタシアー」が言葉を通じて聴衆のうちにも喚起されることを重視する。ここには後のエドマンド・バークの共感にもとづく崇高論との呼応を見ることがもできるだろう。

第三章「瞬間と永遠を媒介するもの——「カイロス」と「アイオーン」」では、ロンギノスが近代的ともいえるような歴史意識を有していたことが論じられる。崇高なロゴスがその瞬間においてだけでなく、歴史的にも普遍的な妥当性を持つにはどうしたらよいか。それには現在を過去と未来との「競合関係」に置くことが必要である。ロンギノスが過去の崇高なテキストを「引用」するのはその実践なのだ。崇高はこうした反復の法に基づくことが明らかにされた。

こうした哲学的な可能性を有したロンギノスの「修辞学的崇高」が時を経て、西洋近代において再発見されることになった際、それぞれの文脈を背景に新たに意味付与がなされ、最終的には「美学的崇高」に転じてゆく。第Ⅱ部「変奏される『崇高論』——近代におけるロンギノス」はそのプロセスを詳細に、かつ批判的にたどったものである。

第四章「崇高論の「発明」——ボワロー『崇高論』翻訳と新旧論争」では、ニコラ・ボワローによる一六七四年の仏訳が持ち込んだ、「崇高な文体」と「崇高」の区別が、当時の新旧論争において、文体論の墮落や過度の形式化に対抗して、単純さを核とする崇高を古

典主義的に擁護したことに由来することを明らかにする。ところが、ボワローはロンギノスの「修辞学的崇高」にあった「パンタシア」と「パトス」を排除してしまった。そのために、その後、ロンギノスの『崇高論』は表舞台から姿を消すことになったというのである。

とはいえ、ロンギノスの「修辞学的崇高」が消え去ったわけではない。第五章「言葉と情念——バーク『崇高と美の観念の起源』と言語の使命」では、崇高を経験的心理学的に読解したエドモンド・バークのなかにも、「パトス」と「共感」への重視があることを指摘し、その痕跡を指摘する。

それと同様に、第六章「美学的崇高」の裏箔——カント『判断力批判』における修辞学」では、「美学的崇高」という今日まで支配的なパラダイムを構築したイマヌエル・カントの議論においても、ユダヤ教の戒律やイシスの碑文が範例としてあげられるように、言語における崇高は極めて重要な位置を占めている。「修辞学的崇高」は「美学的崇高」の核心において作動しているのである。

そして、「修辞学的崇高」は二十世紀後半において再び登場する。その意義を三人の思想家を取り上げて論じたのが、第Ⅲ部「崇高なるパラドクス——二十世紀における「崇高」の脱構築」である。

第七章「放物線状の超越——ミシェル・ドゥギーと「崇高」の詩学」では、ドゥギーの「大言」を主に扱い、そのロンギノス再評価の核心を、高さに放物線状＝寓話的に向かう誇張法に見る。それは比喩の意義の再発見でもあって、「崇高」すなわち高さが比喩との交換によって垣間見られることを跡づけた。

第八章「光のフィギュール——フィリップ・ラクー＝ラバルトと誇張の哲学」は、ハイデガーに想を得たラクー＝ラバルトが、ロンギノスの『崇高論』を、「ピュシス」と「テクネー」のパラドクシカルな露出と退隠の交替として読解したことを明らかにする。第一章の議論がここに重なってくるのである。

第九章「読むことの破綻——ポール・ド・マンにおける「崇高」と「アイロニー」」では、ド・マンが、「崇高」や「アイロニー」を分析することを通じて、アレゴリーすなわち「他のことを言う」という比喩的な作用が言語の根源において作用していることを明らかにしたと指摘する。これは「テクスチュアル・サブライム」とも名づけられてきたものだが、それをロンギノス以来の「修辞学的崇高」として理解し直したのである。

結論は、全九章を簡潔に要約し、「修辞学的崇高」を系譜学的に論じることで、ロンギノスの『崇高論』の包括的な研究に寄与するものとした。

本論文は、「修辞学的崇高」といういわば弱い概念を用いて、「美学的崇高」というカント以来の強力な形而上学の可能性の条件を探究したものである。そのために、ロンギノスの『崇高論』に正面から取り組み、その近代的、現代的な受容と変奏を詳細に跡づけていったのだが、崇高論の議論にきわめて重要な一石を投じたものだと評価できるだろう。

審査においては、「修辞学的崇高」と「美学的崇高」の区別に曖昧な点がある、歴史主義的パースペクティブに立ったロンギノス読解がもう少し必要だ、現代的な読解をロンギノス読解に当てはめる循環論ではないか、さらには言語において崇高とは何かをより積極的に定義すべきだ、といった指摘や疑問も出されたが、いずれも本論文の高い学術的価値を損なうものではないという点で、審査員全員の意見の一致を見た。

以上により、本審査委員会は、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。